
ポーカーフェイス

須崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポーカーフェイス

【Nコード】

N1334P

【作者名】

須崎

【あらすじ】

久しぶりに飲んだお酒が駄目だったんだ、うん。間違っても深く考えすぎない、良くて前向き、悪く言えば単細胞な私の性格のせいでは無いはず！…榊原英里24歳、会社ぐるみの罠にハマられました。

罠と偶然が呼んだ愛のハプニング満載なコメディらぶ。短編予定。現在大幅改稿しております。短編にするためにカットした部分は番外編にするつもりです。

別HP（管理人詩都は同一人物です）にて公開準備中！

そのうちURLも公開。

プロローグ（前書き）

初めまして、須崎です！

なろうに投稿するのは初めてになります。

このお話は私的にうふーwな場面をたくさん入れようと企んでたり。

楽しんでいただけたら跳んで喜びます＼（＾|＾）／

ブローグ

ぎゃー！

「英里さん逃げちゃ駄目でしょ」

「逃げなきゃ奪われる！」

後ろから腰に巻き付けられた腕から逃れんとする。無駄だと思って
も諦めないことは大事だ！

「何が？」

ぎゅ、と逃げられない程度に力が入った。

処女だなんて言えるかー！！

「私の身体が」

「へえ」

とつさにごまかそうとしたがあまり意味がなかった。

というかまずった。今のはまずったぞ！

そう思った瞬間、首筋に痺れが走った。

「っん」

ま、待て待て待て！やばいよっ！

今で身体が密着していることを意識してしまう。背中、腰という
よりお腹に腕が、って胸が微妙に腕にあたっっ！

顔熱い！いやもう全身熱い！誰か助けてくださいー！！

「し、城川さん離して」

「嫌です」

即答ですか。

あ、諦めたら終わりだ私ー！！

？

事の発端は週末の仕事帰り、近頃結婚が決まった宮野さんに

「もう帰るんだよね、用事ないよね？」

と可愛い顔が恐ろしく見えるほどに危機迫る勢いで詰め寄られ、とつさに肯定してしまったのがいけなかった。

「人数確保おーっ！」

携帯電話を片手に叫ぶ彼女に私は事情を察した。“週末”と“人数”のキーワードで推測されるものはたった一つ。

飲み会とは名ばかりの合コンに違いない…！

私ももう24歳、結婚相手どころか彼氏も高校生以来ずっと縁がない。しかも唯一付き合った彼氏とは3ヶ月で自然消滅。

お互い本気じゃなかったのだろうと私は思ってる。

このままじゃ駄目かなあ、くらいにしか思っていなかったし、今もその気持ちは変わらない。

面倒だけど、この機会だし久しぶりにちょっとだけ飲んで抜けようと思ってたのに。

まさか、ねえ。

私が獲物だとは思わないでしょ。

「こうして私はまんまと『罠』にかかってしまったのだった。

？
(前書き)

HPに合わせてページで投稿してます。 ∴ いや、思い通りに投稿できなくて ↑

？

「榊原さん、こっち」

会場に着いてすぐ、我が社の三大美形の一人である城川さんが奥の席から手をあげて教えてくれた。

相変わらずの笑顔は悩殺モノだ。あ、今のお姉さん落ちたな。私も殺られそうです。

今回の会場である駅前のバーは、こじんまりとした落ち着いた雰囲気。気がどこか西欧風の田舎を思わせる。

ほぼ時間通りに着いたのに城川さんを除いて誰も来ていないようだった。

先に飲んでましようという城川さんの意向に賛成する。

その間は仕事の話とか、宮野さんの話をしたりした。なんでも彼女の未来の旦那様は城川さんの悪友（そう言っていた）で、結果的に仲をとりもったことになったそうだ。

城川さんを恋のキューピッド役にしてしまうなんて、何者なんだ宮野さんの彼氏。

話すことがなくなってきた、ただ静かに飲んでいた。そこに気まずさはなく、不思議とその人がいるという安心感があった。

城川さんって癒しオーラでもあるのかなあ…

そんなオーラが見えるはずもなく、ふと彼の顔が涼しげなことにずるいと思った。

？

「…城川さんお酒強い？」

「ん？」

「なんかよーって感じだよ」

もうそろそろ限界な私に比べ、彼はほんのり赤い顔が健康的だねと言われる程度。

何がおかしいのかくすくす笑ってから答えた。

あなたの笑顔は人ひとり殺せます。未遂だけど。

「それでもないよ。俺の顔赤く無い？」

「少しだけ。血色いいですねってくらい」

私はふてくされるようにテーブルに突っ伏した。

「雨降ってるけど、榊原さん傘ある？」

「持ってきてない…」

耳をすませると結構降ってるみたいだ。

駅まで走ればなんとかかなるかな、と少し機能低下気味の頭で考える。

「…12時か。止むのを待つにはもう遅いな」

今夜はぐっすり寝れそうだ。明日は朝寝坊しよーかなあ。

「帰りますー？」

「うん、榊原さん歩ける？送ってくよ」

週明け、女性社員が怖いかもしれない。

このとき私は何の目的でここにいるのか、頭からすっぱり抜けてしまっていた。

他のメンバーが未だに來ないことを疑問に思うどころか、気づきもしなかったのだ。

果たしてそれは酔いのせいなのか、それとも――

？

歩き始めて数分、弱くはない雨に打たれると彼女の酔いも少しは覚めると思ったのだが。

「城川さん、駅こっちじゃないよ…？」

「っ」

方向を変えたことに気付いた彼女が俺の腕を取ったと同時に、柔らかいものが軽く押し付けられる。

わざとなのかと視線で問おうかと思ったが、彼女は至って普通だった。その顔だけは。

彼女の足はおぼつかない。どうやら俺の腕は支えにしているらしい。

「雨がひどくなってきたから、変更」

「？…どこに？」

首を傾げる仕草は小動物のようで可愛いらしい。

「俺の家、といってもアパートだけど。この近くなんだ」

彼女の濡れた髪が顔に貼りつき、コートの合わせ目から見えるワイシャツは下着が見えそうなくらいだ。

酔った彼女をそんな状態で帰らせるつもりは毛頭無い。

「駅まで行くにはまだかかるし、傘も貸せるからね」

抱えられた腕に、彼女が身体を震わせたらしい振動がきた。

「…寒い？急ぐか」

雨は予想外。

——けれど、まだ。

？

気がついたら人様の家のソファに座って、ホットミルクを戴いていた。

さつき頭を拭いてもらってたような…その前に雨の中を歩いて、あれ？私何した？足がふらついたから近くのものにつかまって、でもってそれはあつたかくてつい抱きつい…うわあやばい！

どうやら私は酔って記憶が曖昧で、ホットミルクという刺激で覚醒した、と。

「榊原さん、まだ酔ってる？」

「わあっ」

「覚めたみたいだな」

びつくりした。隣りに座ってるのに気付かなかったよ。

ここまでの道のりを覚えているかと聞かれて、頷いた。とてもじゃないが堂々と答えられない。

恥ずかしすぎて、穴があつたら入りたいとはこのことかと実感する。

「これで拭いて」

そつえば頭は拭いても身体はまだだったのでありがたく頂戴する。

「ありがとう」

「風邪引くから風呂入っていつて。着替えは妹のがあるから気にしなくていい」

ここに置いとく、と言って別の部屋に行った。

「…お風呂？」

待って、着替えがどうかという話じゃないよ！お、お風呂って！ていうか妹さんいたんですかってああ！普通城川さんが先でしょうが！

とにかく丁重にお断りしなくては、と彼の後を追う。

「城川さん！」

私は勢いよく彼が入ったと思われる部屋のドアを開けた。

？

そして固まった。

城川さんは着替えている途中だったらしく、上半身裸で肩にタオルをかけていた。

「…っごめんなさい！」

きやああ私ったら何やってるの！

すぐさま出て行こうとするが止められた。彼の腕と思わしきものが右から私の前を通り、左肩を押さえる。

後ろにいる城川さんの気配が近くに感じられ、私は再び固まってしまった。

「待つて。どうかした？風呂ならさっきの部屋から直行だけど」
上から聞こえた声にはっとして振り向く。

「お風呂は城川さんが先です！」

彼は一瞬ぼかんとして、すぐに納得がいったような顔になる。

「ああ、俺は着替えれば平気。榊原さん入っていいよ。顔赤いし、大丈夫？」

それはあなたが色男だからですつ。

まだ乾ききっていない艶やかな黒髪に均整のとれた引き締まった身体。そしてなにより至近距離にある整った顔。
振り向いたときにしっかりと見てしまったのだ。

男に免疫がなくてすいませんね、赤くなって当然です！

「…でも私」

「……榊原さん」

「えっはい何でしょう!」

「早く入ろうね?」

笑顔。

逆らえない何かが確実にあったと思う。

「はいっ!!」

叫ぶように返事をしながら出ていく私だった。

？

自宅に着いてすぐに彼女の頭を拭く。色素の薄いブラウンの髪は、肩までの長さとはいえ水気を取るのに時間がかかった。

明日休みで良かったですね、と一応会話はしていたのだが、軽く微笑む彼女に見とれて時々手も会話も止まってしまったりした。

それからリビングのソファに座らせてホットミルクを渡すが、ぼーっとしながらホットミルクを口にしようとするところを見るとまだ酒が抜けきっていないようだ。

身体は拭いてやるわけにもいかず、タオルだけ渡して自分も着替えることにした。

風呂は朝出る前に予約したからすぐに入れるだろう。

まったく彼女のあの格好は目のやり場に困る。さっさと部屋を出るに越したことはない。

下を脱ごうとするところで榊原さんがノックもせずに入ってきた。大分驚いたが、それ以上に彼女が動揺しているのがわかる。

身体を拭くように言ったのにまだ拭いていないようだし、普段取り乱すことがない彼女が顔を赤らめ動揺しているのがおかしかった。

飛び出そうとするのを押さえると、ますます熱を持ち始めたのが触れる肩から伝わってくる。

……熱すぎないか？

さっきから反応が鈍かったり逆にテンションがおかしかったりする
のは熱のせいかと焦る。

俺に意識を向けてもらおうとしたのには少し強引だったと認めよう。

——俺だけの責任とは微塵も思っていないが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1334p/>

ポーカーフェイス

2011年5月19日15時22分発行